

# 【無料配布】短編ミステリ

（文学フリマ京都10書き下ろし）

作..庵字（新生ミステリ研究会会長）

## 盗まれた五千円札

繁華街にあるビジネスホテルの一室で他殺体が発見された。被害者は暴力団の構成員で、従業員への聴取により、チェックイン時に被害者が持っていたはずのスーツケースが消えていることが分かった。この日は日曜日。たまたま近くをぶらぶらしていた探偵は、警部に呼び出されて現場のホテル前に到着した。

「きみが近くにいてくれてよかったです。いつものように力を貸してくれ」

「僕にとつては全然よくないです。お昼は奢つてくださいね、警部」

警部の言葉に、ため息を漏らした探偵の脇を、背広姿の男性二人が走り抜けていく。その背広の二人は、すれ違いざまに警部と目礼を交わしていた。

「警部、今の二人も刑事ですか？」

「ああ、と言つても、三課の連中だがな」

「三課？ 窃盗事件担当の刑事が、どうして？」

「この付近で別の事件——もちろん窃盗事件——も起きたからだ。聞くところでは、ちんけな盗みらしいが。君は殺人事件のほうに注力してくれ」

「それは、もちろん……」

容疑者のものと思われる顔写真を見せながら、通行人に聞き込みをかけている三課の刑事を横目に、探偵は警部に連れられてホテルに入つていった。

ホテル従業員たちに聴取をしたが、被害者は確かにスーツケースを持ち込んでいたはずだ、という他には、「W—I—F—Iが繋がりづらい」という苦情を受けて中継ルーターを届けたことがあつたという話が聞けただけだった。

「事件に関係するような有力な情報はなかつたな」

「そうですね……」

ホテルを出た警部と探偵は、先ほどそれ違つた三課の刑事たちと顔を合わせた。「どうだ、調子は」「さっぱりだ」と三課の刑事と警部は、互いの捜査状況が芳しくないことを確認しあつた。

「うん。店員の記憶によれば、十時二十分だ。犯行の十分くらい前だな」

「ちょっと、いいですか」そこに探偵が、「そちらは、どんな事件なんですか？」  
「けちな窃盗ですよ」と、三課のコンビのうち若いほうが、「被害者は、近くの飲食店を利用してた男で、トイレを出たところ、テーブルに置いていた財布から現金を抜き取つている男を目撃して、声をかけると逃走したそうです」

「少しの間だとしても、貴重品から目を離しちゃいかんな」

警部が言うと、「本当にそうですよ」と三課の刑事は嘆息してから、「でもですね、話によると、その窃盗犯というのが少し変で……」

「変？ どういうことだ？」

「被害者が言うには、抜き取られたのは五千円札一枚だけだつたらしいんです。財布には他に一万円札も二枚入つていたのに。魔が差した咄嗟の犯行で、慌てていたんですけどね」

「それだけじゃない」と今度は年配のほうの三課刑事が、「その窃盗犯、同じ店でレジからの窃盗未遂もやつていたんだ」

「窃盗未遂？」

「ああ。店内の防犯カメラをチェックして、その五千円窃盗犯の顔が特定できたから、ついでに犯行前後の映像も確認してみたんだ。そうしたら、店員のいない隙に、同じ男が店のレジを漁つている様子が映つていた」

「しかし『未遂』ということは……」

「そうだ。被害額確認のために急遽レジ締めをしてもらつたんだが、金額に不足はなかつたそうだ。レジを開けて中の現金を物色したのに、何も盗らなかつたといふことになる。わけがわからんよ」

「その窃盗犯の写真を持って、聞き込みをしているんだな」

「ああ、防犯カメラの映像から印刷して」

「その男の目撃情報は得られたのか？」

「今のこところ一件だけだ。そこ……」と三課刑事は十数メートル先にある喫茶店を指さして、「……の店の店員が証言した、本日開店して最初の客だったから、よく憶えていたそうだ。コーヒ一杯だけ飲んで、すぐに出たらしい」

「その男が店に来た時間って」と、またも探偵が口を挟み、「財布からの窃盗事件が起きる前ですか？」

「うん。店員の記憶によれば、十時二十分だ。犯行の十分くらい前だな」

三課の刑事たちと別れると、探偵はその喫茶店へ向かって歩き始めた。

「おい、窃盗よりも、こっちの殺人のほうを優先してくれよ」

ついていきながら、警部が不満の声を浴びせたが、「ちょっと待ってください」と探偵は、喫茶店に到着するとドアを押した。

探偵は、警部に警察手帳を開示してもらい、店員に話を訊き始めた。

「例の男性は会計の際に……一万円札を出したんじやありませんか？」

「そうです」店員は頷いて、「ちらっとそのお客様の財布の中が見えたのですが、

千円札も五千円札も入っていたのに、わざわざ一枚だけあつた一万円札を

「お釣りはいくらでしたか？」

「うちにはコーヒ一杯三百円なので、九千七百円でした」

「お札に五千円札は混ぜましたか？」

「ええ」

「その五千円札ですが……旧紙幣と新紙幣の、どちらでした？」

「新紙幣です、津田梅子の。間違ひありません」

それだけ聞くと、礼を述べて探偵は喫茶店をあとにした。

「おいおい、今のにどんな意味があるんだ？ また五千円札……」

「警部、犯人の見当がつきましたよ」

「——はあ？ 誰だ？」

「三課が追っている窃盗犯です」

「なに？」

「客室で被害者を殺したあと、スーツケースに大量の紙幣が入っていることに気づき——あるいは、順番は逆かもしれません——盗み出したんですよ。その紙幣というのが、すべて五千円札だったんです。桶口一葉の旧紙幣の」

「どうしてそんなことが分かる？……それに、窃盗事件と、どう繋がると？」

「おそらく犯人は、殺したあとで被害者が暴力団員だと知ったのでしょうか。で、そんな反社会の人間が、五千円札ばかり大量に持っていた。誰だって変だと思いま

すよね。これはまともなお金じゃないなって」

「だろうな」

「そこで犯人は、こう考えたんですよ。これは“偽札”かもしれない、って

「——そういえば、その暴力団は過去に偽札事件を起こしたことがある！」

「その紙幣が本物か偽札か、まずは確かめたかったんですよ、犯人は。偽札であれば迂闊に使うわけにはいきませんからね。でも、その手段がなかつた」

「手段？」

「犯人手持ちの現金に、桶口一葉の旧五千円札がなかつたんですよ」

「——そういうことか！ 今は現金をあまり持ち歩かない人が多いからな」

「そこで犯人は、お釣り目的で、喫茶店でコーヒーを一杯だけ飲みましたが……」

「会計で万札を出すも、お釣りに受け取った五千円札もまた、津田梅子だった！」

「世に出ているお札は、あらかた新紙幣に切り替わっていますからね。喫茶店員

の話では、犯人の財布に万札は一枚だけだったそうですから、お釣りや両替で五

千円札を入手することはもう出来ない。今日は日曜日で銀行やATMも閉まっています。危険な紙幣だということは分かりきっていますから、とにかく早く札の

真贋を判定して、持ち去るなり捨てるなりを決めたかった。隙を見て飲食店のレジも物色しましたが、旧五千円札はなかつた。開店直後だから万札も入っていないなかつたのでしょう。で、その店のテーブルに財布が置いてあるのを見て……」

「ようやく旧紙幣を手に出来たわけか。で、その犯人は今、どこにいると思う？」

「さつそく盗み出したお札と照合するはずです。大量の札が入ったスーツケースなんて危険なものを手元に置いたりはしていないでしようから……」

「コインロッカー！」

警部は付近一帯のコインロッカーに刑事を張り込ませ、ひとりの男の身柄を確保した。大量の五千円札が入ったスーツケースを取りだしたその男は、事件のあつたホテルの従業員だった。被害者の部屋にルーターケースを届けた際、スーツケースの中に大量の札束が詰まっているのを見て、深夜マスターを呼び出させて犯行に及んだという。物色した所持品から殺した男が暴力団員だと分かり、その暴力団が過去に偽札事件を起こしたことでも検索で知り、この紙幣も偽札ではないかと疑いを持つたという。動機は、ギャンブルにより抱えた多額の借金だった。後日の鑑定で、スーツケースの中身はすべて偽札であることが確認された。

(了)

